

## ベールイの『青銅の騎士』論 —「国家と個人」の主題について—

柿沼 伸 明

### 序 ベールイの『青銅の騎士』論，そのテキスト解釈上の問題点

アンドレイ・ベールイ（1880-1934）は、著書『弁証法としてのリズムと『青銅の騎士』』（以下、RD と略）の第4章において、詩のリズムの計量化・グラフ化の理論<sup>1</sup>を基に、プーシキンの物語詩『青銅の騎士』（以下、MV と略）を批評した。本稿の課題は、ベールイによる MV 解釈の概要を示すとともに、これまでのプーシキン研究と照らし合わせながら、その妥当性を検討することにある。

MV の最大の難点は、『エヴゲーニイ・オネーギン』における 1 連 14 行詩というような固定した詩形式から構成されていないことだ。詩行の韻律は基本的に弱強 4 歩格を維持しているものの、詩連という単位は存在しない。そこで、ベールイは詩連の代替物として「обрывок」（本稿ではこれをブロックと訳し、block > bl. と略す）なる概念を提唱した。RD では、MV テキストは 22 と 55 のブロックに分割されている。

筆者が困惑させられた最たる事情は、ベールイが使用している MV テキストが、現在、正典とみなされているテキストと異なる点だ。まず、全体の詩行数からして一致していない。現行の MV テキストが 493 行から成るのに対し、ベールイのものだと、それより 16 行少ない 477 行である（本稿では、詩行番号は現行テキストに依拠）。しかし、この問題はプーシキン研究者メドリシの研究書を読むことで氷解した。メドリシによると、エヴゲーニイがパラシャとの結婚の決意を語る内的独白部分、つまり、第 1 篇の 16 行（144. Евгений тут вздохнул сердечно ~ 159. И внуки нас похоронят...») は、詩人の清書原稿に存在しなかったため、1950 年まで一般的には MV テキストに含まれていなかった。<sup>2</sup> だ

<sup>1</sup> 詩のリズムの計量化・グラフ化の詳細については、参照：柿沼伸明「ベールイの『弁証法としてのリズムと『青銅の騎士』』—詩のリズム曲線に関する仮説について—」『SLAVISTIKA』第 27 号、2012 年、39-72 頁。

<sup>2</sup> См.: Медриш Д. Литература и фольклорная традиция: Вопросы поэтики. Саратов, 1980. С. 37. Мэдришが述べている 1950 年という年は、1937 年から発刊され、1949 年に完結した 16 巻本アカデミー版プーシキン全集（1959 年刊行の第 17 巻補巻あり）の MV テキストを指していると思える。См.: Пушкин А. Медный всадник // Пол. собр. соч.: В 16 т. М.-Л.: АН СССР, 1937-1949. Т. 5 (1948). С. 136-147. 現在、ロシアで刊行されている MV テキストは、16 行の脱落がない 1948 年のアカデミー版に依拠している。これが、本稿で用いる「現行テキスト」の謂いである。1927 年にベールイが参照した MV テキストは、16 行が脱落したアカデミー版以前のものだったと推定される。

が、本当に厄介な事態は、詩行の配置と文言に関して、ベールイの使用テキストと現在のものとは異なることだ。詩行配置の相違は序詩のみに当てはまる。以下、例をあげる。現行テキスト 40 行 «младшей столицей» に対し、ベールイでは 36 行 «юною царицей» となっており、形容詞も違う。<sup>3</sup>

(現行テキスト)

22. Прошло сто лет, и юный град,  
25. Вознесся пышноб горделиво;  
26. Где прежде финский рыболов,  
36. В гранит оделася Нева;  
40. И перед младшею столицей  
43. Порфироносная вдова.

(ベールイのテキスト)

22. Прошло сто лет, и юный град,  
25. Порфироносная вдова.  
26. В гранит оделася Нева  
36. И перед юною царицей  
43. склонилась... Москва

さらに、詩の文言の違いが MV 解釈の根本にかかわってくる箇所もある。例えば、MV では「詩人」(現行テキストの поэт) という言葉が、145, 355, 370 行で使われている。ベールイは 145 行を読んでいないが、355, 370 行の「詩人」をそれぞれ пиит, пиита と引用している。特に、370 行のエヴゲーニイの棲家に引越してきた詩人を «бедный пиита» と表記している。<sup>4</sup> 18 世紀語彙である пиит あるいは пиита<sup>5</sup> は、ダーリの辞書にも単語としては立項されておらず(わずかに поэзия の項目に出現)、1935-1940 年刊 4 巻本ウシャコフ辞典では、пиита の形は古語とされている。1966 年刊『詩的言語辞典』(Поэтический словарь)によると、両語とも古典ギリシア語 ποιētēs を発祥とするビザンチンのスラヴ語の語彙であり、1850-1875 年(в первой трети прошлого века)にはオード(頌詩)で用いられた由。これを踏まえて、プーシキンは、両語をアイロニカルな意味(つまり、「へぼ詩人」の意味)として用いたと想像される。このことは、プーシキンの辞世の句とみなされる詩「記念碑」(1836)の «Славен буду я, доколь в подлунном мире жив будет хоть один пиит.»(拙訳: 月<英語の moon>の下に一人でもへぼ詩人がいる限り、わたしは称賛されるであろう)という文言からも明らかだろう。19 世紀プーシキン語彙における поэт / пиит(a) の関係性は、現代英語の poet / poetaster に相当するのではないだろ

<sup>3</sup> См.: Бельй А. Ритм как диалектика и «Медный всадник». М.: Федерация, 1929. С. 154.

<sup>4</sup> См.: Там же. С. 173.

<sup>5</sup> 1981 年刊白水社『仏和大辞典』(伊吹武彦他編纂)の«poète»の項では、この語の発音に関し、「[pwet]という 17 世紀の発音は現在ふざけて用いられるだけである」という解説がある。18 世紀に、「プエート」という仏語が、露語に流入し、「ピエート」「ピエータ」という語形に変化したのではないかと推測される。『詩的言語辞典』の解説「ビザンチンのスラヴ語の語彙」とは矛盾するが。

うか。

ベールイは、狂人エヴゲーニイ=бедный пиита=作者プーシキンと読む。すなわち、プーシキンは意図的に洪水後のエヴゲーニイを発狂させ、乞食生活を強い、青銅の騎士との対決の場面で初めて正気を取り戻させた(第2篇 415-416行: Прояснились В нем страшно мысли.)。換言すると、主のいなくなったエヴゲーニイの部屋に入居したへぼ詩人こそが、作者の分身に他ならないとする解釈だ。プーシキンがエヴゲーニイに仮託した想いは、1833年、デカブリスト事件後に執筆された以下の無題詩の最初2行に籠められているという。

Не дай мне бог сойти с ума, —  
Нет, лучше посох и сума...

神様、わたしが気が狂わないようにお願いします  
いいえ、(そうなるよりはわたしに) 乞食の杖とズタ袋をお恵みください

ベールイがMVのリズム曲線研究に集中的に取り組んだのは、1927年と考えられる。<sup>6</sup> 当時の彼が読んだMVテキストがどのような形態となっていたかは、今となっては断片的にしかわからない。こうした経緯を前提としたうえで、筆者はベールイのMV解釈を考察する。

## 1. RDで示されたMVのリズム値計算の原則

### 1-1. 文の行送り(перенос)の問題

MVでは、詩行の途中で文が終わっていることが多い。そのため、一文の行送り(перенос)が生じる。19世紀ロシア詩において、詩行末はほぼ必ずシンタックス上の単位の終わり(特に、文の終わり)と一致しており、詩行途中で文が切れることは変則的な現象といえる。朗読上、詩行途中の文末(ピリオドの後)には、「大きな休止」(||)が置かれる。ベールイは、MVに固有な行送りの問題を、以下の483-489行を例に説明する。<sup>7</sup>

483. Пустынный остров. || Не взросло            U/| U/| U || U | U/

<sup>6</sup> См.: Лавров А. Андрей Белый в 1900-е годы. М.: Новое литературное обозрение, 1995. С. 323; Белый А., Ивнов-Разумник. Переписка. СПб.: Atheneum-Феникс, 1998. С. 556. (1925年12月25日のベールイ書簡) 1927年10-11月にベールイはMV研究に専心した。

<sup>7</sup> См.: Белый. Ритм как диалектика и «Медный всадник». С. 146-147.

484. Там ни былинки.    Наводненье	U U   U/   U    U   U/   U
485. Туда, играя, занесло	U/   U/   U U   U/
486. Домишко ветхой.    Над водою	U/   U/   U    /   U/   U
487. Остался он как черный куст.	U/   U/   U/   U/
488. Его прошедшею весною	U/   U/   U U   U/   U
489. Сvezли на барке.    Был он пуст.	U/   U/   U    /   U/

489行は2つの文末がくるが、2文目の **Был он пуст.**の後には、「文法的、論理的、リズム的」な三重の休止が置かれる。それに影響されて、**Сvezли на барке.**の後の行間休止は非常に長くなる。韻律 (U/ | U/ | U || / | U/) の観点からすると、489行と486行は一致するが、この休止の長さの違いゆえ、489行の詩行リズム値は486行の反復0.6とはみなされず、1と計算される。他方、486行は行間休止と文の区切りの位置が等しい483行の反復とされ、0.6となる。詩行リズム値の計算式は  $(n-1) \div n$  ( $n$  は詩行間距離)。第2例の場合、 $486-483=3$  が  $n$  で、 $(3-1) \div 3=0.6$  (小数点以下10桁は切り捨て) となる。

### 1-2. 一詩行が二行に分断されたケース (красная строка) の解決法

現代ロシア語では、**красная строка** とは、通常、改段落時の字下げを伴う最初の行を意味するが、ベールイは、弱強4歩格を半分で切って、2行に分割しているケースにこの術語を適用している。RDでは、これら2行は弱強2歩格とみなされ、両行ともに前行への対照(リズム値1)とされる。<sup>8</sup> 下の206-207行の例では、**Где будет взять? В тот грозный год** というように、弱強4歩格の1詩行として扱わない。

206. Где будет взять?	//   U/
207. В тот грозный год	U/   U/

### 1-3. ブロック分割 (разбиение текста на отрывки) の考え方

詩連の代替物であるブロックの分割は、全部で10ある空白行、そして序詩、第1篇、第2篇の後の余白が指標となる。現行MVテキストでは、ブロック数は序詩6、第1篇6、第2篇8の計20個が存在する。しかし、ベールイは意味の区切りを考慮してなのか、使用テキストに現在のものとは異なる空白行があったのか不明だが、第2篇の388. **Ни призрака мертвый...** ~ 389. **Раз он спал** と 425. **Ужасен он в окрестной мгле!** ~ 426. **Какая**

<sup>8</sup> См.: Там же. С. 147-148.

дума на челе! を独立したブロックとみなし、全体を 22 個に細分化する。そして、22 の集合体をさらに各内部で分割し、55 個のブロックに再編成する。それゆえ、22 分割と 55 分割の区切れは必ず一致する。彼は、55 分割方式によって描きだされるリズム曲線こそが、MV のリズムの流れを真に伝える「写実主義的な曲線」(реалистическая кривая)<sup>9</sup> と評す。ベールイが 22 ブロックをどのように 55 個に再配分しているかを見てみよう。44～84 行は、22 分割だと第 3 bl.、55 分割だと第 6～9 bl. に当たるが、文体的に «Люблю...» の 4 度の繰り返しになっており、内容的にも、ペテルブルクの春の光景、冬の光景、軍行進、皇太子誕生や戦勝や春の訪れの際の国民的喜びというように、4 つに区切れる。

(第 6 ブロック)

44. Люблю тебя, Петра творенье, (以下, 59 行までの計 16 行)

(第 7 ブロック)

60. Люблю зимы твоей жестокой (以下, 67 行までの計 8 行)

(第 8 ブロック)

68. Люблю воинственную живость (以下, 75 行までの計 8 行)

(第 9 ブロック)

76. Люблю, военная столица, (以下, 84 行までの計 9 行)

#### 1-4. 平均値という視座

ブロック数は 22 個と 55 個に弁別されたが、MV 全体の各詩行リズム値は、全体を通貫するものとして計算される。例えば、全 4 連から成る 1 連 4 行詩の場合、第 1 行のリズム値は必ず 1 となり、最終 16 行までのリズム値の変動が、連の枠を越えて一貫して記述される。MV の場合でも、第 1 行リズム値=1 とされた後、序詩・第 1 篇・第 2 篇またはブロックの範疇を度外視して、最終 477 行までの各行のリズム値が割り出される。この作業の結果、以下の詩連リズム値の公式 (m は 1 詩連内の詩行数、n は詩連内の詩行リズム値の総和) から、物語詩全体のリズム値と、詩連に相当する各ブロックのリズム値が算出される。

$$\frac{n \times 4}{m}$$

MV 全体のリズム値は、各行リズム値の総和は 307.1 であるので、 $307.1 \times 4 \div 477 = 2.6$

<sup>9</sup> См.: Там же. С. 149.

となる。さて、ベールイの独特の発想法は、この 2.6 という数を詩全体の平均値 (нормаль) と定義し、22・55 分割における各ブロックのリズム値が平均値からどれほど離れているかによって、音と内容との相関性を探ろうとするものだ。<sup>10</sup> 言葉を換えると、各ブロックのリズム値の推移をグラフ化し、平均値より高いか低いかによって、詩のリズムの「ジェスチュア」と意味形象の連関を追究しようとする。

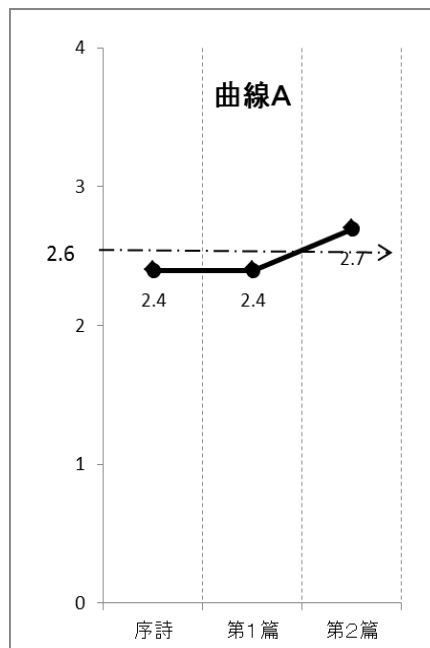
## 2. ベールイの批評戦略と 3 つの曲線

ベールイは 3 つの曲線グラフを提示する。3 つの曲線グラフとは、序詩・第 1 篇・第 2 篇の平均値の推移 (曲線 A)、22 分割の各ブロックの詩連リズム値推移 (曲線 B)、そして 55 分割の各ブロックの詩連リズム値推移 (曲線 B) である。各グラフともに、平均値 2.6 の線が横に引っ張ってあり、それより高いか低いかが問題となる。

### 2-1. 曲線 A

序詩・第 1 篇・第 2 篇のリズム値は、それぞれ 2.4, 2.4, 2.7 となる。序詩・第 1 篇は平均値より下で同値、第 2 篇は上。ベールイは、この結果が第 2 篇から始まるプロット上の急展開と相応しているのではないかと問う。

序詩では、「ピョートル、その思念、ペテログラードの発生、首都を襲った恐ろしい時」という「非個人的」あるいは「皇帝の」テーマが提示されている。第 1 篇で初めてエヴゲーニイが登場する。彼は単なる一庶民にすぎない(113 行:Прозванья нам его не нужно)。冒頭でネヴァ川に対峙する名の知れない君主 (2 行:Стоял он) と姓のない一庶民は、第 2 篇に至って「個人性」(личность) をむき出しにする。序詩の 10 行「霧に覆われた太陽」(В тумане спрятанного солнца) で既に暗示されていたように、賢帝ピョートル 1 世の暴君性が暴かれる (425 行:Ужасен он в окрестной мгле)。エヴゲーニイも



<sup>10</sup> См.: Там же. С. 165-166.

また、興奮して怒りに燃え、青銅の騎士にプロテストする。つまり、序詩・第1篇の2.4と第2篇の2.7のリズム値の相違は、新帝都の華やかな外見とその裏に潜む本質、権力者の暴政と市民の叛逆、非個人性と個人性という対立を表している、とベールイは読み解く。さらに、第2篇の2.7が平均値より上という事実から、詩のプロット上の力点は第2篇に置かれていると述べる。<sup>11</sup>

## 2-2. 曲線 B

曲線 B の二つの特徴は、3つの谷 (ущелье) と2つの山脈 (хребет) があることだ。峡谷とは平均線 2.6 より低い折れ線の落ち込み (bl.1-6, bl.11-13, bl.19-21)、山脈とは平均線より高い頂点の連続 (bl.7&10, bl.14-18&22) を指す。このグラフ傾向から、物語詩は二つの主題の対位法から構成されている。<sup>12</sup>

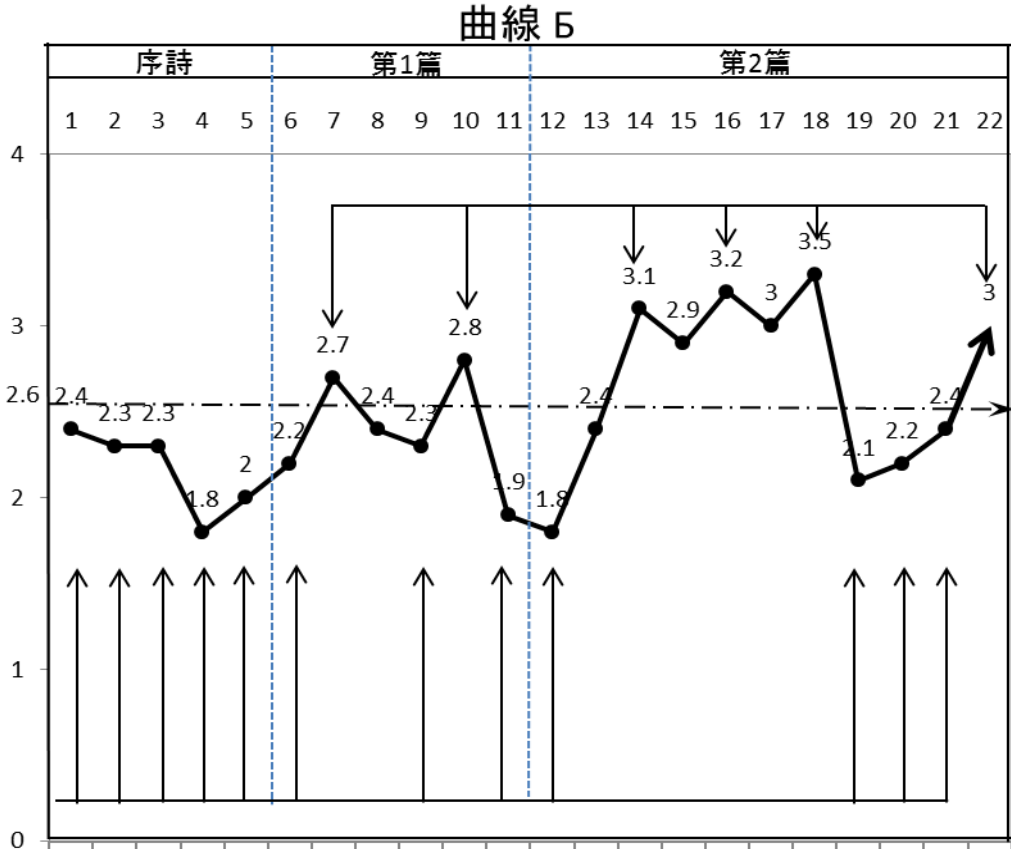
ベールイの論考の仔細を見てみよう。最初の谷の最大の窪みである bl.4 (85-92 行) では、ピョートル大帝が建設した都市の盤石不動 (неколебимость) が語られている。2番目の谷の bl.11 (256-264 行) で洪水の最中に青銅の騎士像が登場する。続く bl.12 (265-278 行) において、洪水=略奪を働く злодей (悪党) の比喩が現れるが、語源から「зло (悪) を犯す者」=大帝が暗示されている。3番目の谷の bl.19 (426-434 行) で大帝の絶大な力が示され、430 行の「この蹄をどこにおろせばよいのか」(И где опустишь ты копыта?)<sup>13</sup> を受けて、bl.20 (435-466 行) の騎士によるエヴゲーニイ迫害が始まる。ベールイは、bl.20 のなかに「国家権力が個人を踏みにじる」(государственная власть раздавливает личность) という давёж (蹂躪) の主題を読み込む。すなわち、3つの谷は、ピョートル体制の堅固、大帝=悪人という仄めかし、権力による民衆叛乱の扼殺を表現している。

次に、2つの山脈を検討する。最初の山脈である、bl.7 (109-168 行; 但し、144-159 行は当時存在せず) の2.7では洪水前のエヴゲーニイの将来設計、bl.10 (225-255 行) の2.8ではライオン像に跨り、「運命に対してプロテストする元老院広場元老院広場のエヴゲー

<sup>11</sup> См.: Там же. С. 172-174.

<sup>12</sup> См.: Там же. С. 174-177.

<sup>13</sup> 故木村彰一先生は、この箇所を「おごれる馬よ どこへおまえは飛んでいくのか? どこに蹄をとめるのか」(『プーシキン全集1 (抒情詩・物語詩I)』河出書房新社、1973年、619頁)と訳されており、大帝の野望が果てのない様だと解釈されている。ベールイは、民衆を踏みにじる蹄、つまり圧政の象徴と捉えている。ベールイがいう「давёж」の語源となる動詞 давить は、単に「押しつける」という意味でしかないが、この語は раздавить の意味と重ねあわされている。例えば、「Конь раздавливает человека」という文では、「馬の蹄が人を押しつけ、その結果、押しつけられた人が重傷または死にいたる」と含意される。他方、「Конь давит человека.」(馬が人を踏みつける)では、意味が違う。そのため、プーシキン原文の「И где опустишь ты копыта?」のベールイの解釈では、「国家による市民の蹂躪」という見地が導出される。



ニイ」<sup>14</sup> が描かれている。二つ目の山脈の最初の頂上 bl.14 (302-331 行) の 3.1 で、主人公は恋人パラシャの死を知り、次の頂上 bl.16 (358-388 行) の 3.2 で発狂し、bl.18 (415-424 行) の 3.5 で一瞬の意識の回復の後、青銅の騎士に反逆する。曲線は bl.18 から bl.19 まで急降下した後、再び上昇に転じ、最後の bl.22 (476-493 行) で平均線より上の 3 (エヴゲーニイの死の事後報告) で終了する。要するに、最初の山脈は、主人公の将来についての夢が洪水によって台無しになる様を伝え、続く第 2 の山脈では、彼の苦悩、発狂、権力への抗議、そして死が語られている。ベールイは次のように論を結ぶ。

<sup>14</sup> *Белый*. Ритм как диалектика и «Медный всадник». С. 176. 原詩 225 行の «...на площади Петровой» を単純に読むと、冬宮に隣接する元老院広場のことだと思ってしまう。だが、これはベールイの誤読だ。ライオン像は、イサーク寺院のあるイサーク広場 (Исаакиевская площадь) に面したロバノフ=フロストフスキー家 (Лобанов- Ростовский) の邸宅 (1817-1820 年に建設され、現在も保存) にあった。詳細は以下を参照。См.: *Скуновалов А.* Город на Неве. Л.: Лениздат, 1967. С. 268. 杉野ゆり氏によると、ライオンという野獣の形象は、洪水の暗喩であり、1830-31 年にロシアで流行した疫病コレラと、それに続く民衆暴動に由来するとの説を唱えられている。参照：杉野ゆり 『青銅の騎士』論—野獣のメタファを解いた場合— 『むうざ』第 7 号, 1988 年, 27-37 頁。



詩のテーマは、2.6の平均線を境として2つに分かたれる。すなわち、(平均線より)上のテーマと下のテーマだ。上のテーマは、不安におびえ、不満をもち、苦悩し、反逆し、そして死んでいくエヴゲーニイである。下のテーマは、人の業とは思えぬ力で、周囲の反対を押し切り、(敵国スウェーデンに)対抗し、その脅威となるために新首都を建設した超人ピョートルを表す。ピョートルは青銅の騎士に変身し、魔力で洪水を招きよせ、住宅を襲わせ洗い流させた。彼は洪水を支配していた(洪水は悪人の形象をとる)。<sup>15</sup>

ベールイはMVをソナタ形式の交響曲と捉えている。楽曲は低音の第1主題(国家権力の掌握者ピョートルと彼が創った壮麗な首都)から始まり、途中で第2主題(国家によって踏みにじられた個人生活)の高音に変奏し、対位法の規則に従って、低音と高音が対照された後、最終bl.22のリズム値3の「エヴゲーニイの死」でフィナーレを迎える。bl.4とbl.12の最低音の1.8は、それぞれピョートルの新首都の堅固、洪水=злой=ピョートルを表現し、bl.18の最高音3.5は、正気を取り戻した狂人エヴゲーニイが、大帝の新都建設計画の野望が洪水を惹起したことを悟り、青銅の騎士像への反逆心を燃え立たせる様を示す。最低音1.8+最高音3.5÷2=2.65の数値に最も近いbl.7の高音2.7は、洪水前のエヴゲーニイの日常の心情、不幸の予感を描いており、中位の音階を形成する。

曲線Bの考察において、ベールイはMV解釈の核心に触れ始めている。洪水後、エヴゲーニイが正気に戻って騎士像に抗議したのは、1825年11-12月(12月にはデカブリスト叛乱が起きたので、おそらく11月)のこととされる。主人公の死と遺体の発見は1826年の春(5月以降)に起きた。<sup>16</sup>これは、デカブリスト叛乱首謀者の処刑の時期と1826年7月の首謀者処刑の年号と符合している。遺体搬送を記した488行の「去年の春」(прошедшею весною)とは、詩の執筆年代である1933年を斟酌すると、1931か1932年の春に当たるように思えるが、1825-32年に被災家屋が撤去されなかったとは考えられない。最も蓋然性が高いのは、1826年に家屋が片づけられたという見方だ。<sup>17</sup>ペテルブル

<sup>15</sup> Бельй. Ритм как диалектика и «Медный всадник». С. 178.

<sup>16</sup> 一見すると、エヴゲーニイの反抗を1825年11月に特定するベールイの論拠は理解に苦しむが、以下の歴史的経緯を考慮しているのではないだろうか。アレクサンドル1世は、第1継承者コンスタンチン大公の皇位継承辞退の手紙を受け、1823年には次期皇帝をニコライ大公とする布告を既に発していた。おそらく、旧暦1825年11月19日にアレクサンドル1世が滞在先タガンローグで急逝した報が首都に届くのが遅れたことにより、12月12日になって初めてM.スペランスキーが「新皇帝戴冠」の布告を起草し、13日朝、ニコライ1世がこれに署名し、14日が軍隊の新皇帝への宣誓式と定められた。この勅令を受け、デカブリストである陸軍将校たちは、立憲君主制を要求する蜂起の日を12月14日に決めた。つまり、11月にはニコライI世の新帝就任は決定済みであった。

<sup>17</sup> См.: Там же. С. 175.

グにおける最大の洪水が生じたのは、旧暦 1824 年 11 月 7 日のことである。<sup>18</sup> ベールイの解釈では、エヴゲーニイは第 2 篇 358 行 (Но бедный, бедный мой Евгений) から浮浪生活を送るようになり、その約 1 年後の 1825 年 11 月 (415-466 行) に青銅の騎士と対峙した。358 行から 415 行まで、どれほど時間が経過していたかは、原文テキストからは判然としない。これはベールイ独自の読みである。

### 2-3. 曲線 B

曲線 B においても、ベールイ批評の方略は、「国家と個人」の主題を平均線よりも上か下かで見究めようとすることにある。平均線より下が、個人の運命の支配者としての青銅の騎士、つまり為政者、国家性、国家権力による市民生活への迫害が主題であり、平均線より上が、国家内部で生きる個人の日常生活、不満、苦悩、反逆となる。ベールイは、平均線 2.6 を中心として、 $\pm 0.1$  (2.7 と 2.5)、 $\pm 0.2$  (2.8 と 2.4) というように、1 ポイントずつ上下に変動したなら、どのように形象の意味が変容していくかを検証している。しかし、ここでは評論の細部に深入りせず、3 つのイメージだけを取り上げ、それらが相乗作用をおこしながら、物語詩の主要な主題に収斂されていく様子に眼を凝らしたい。

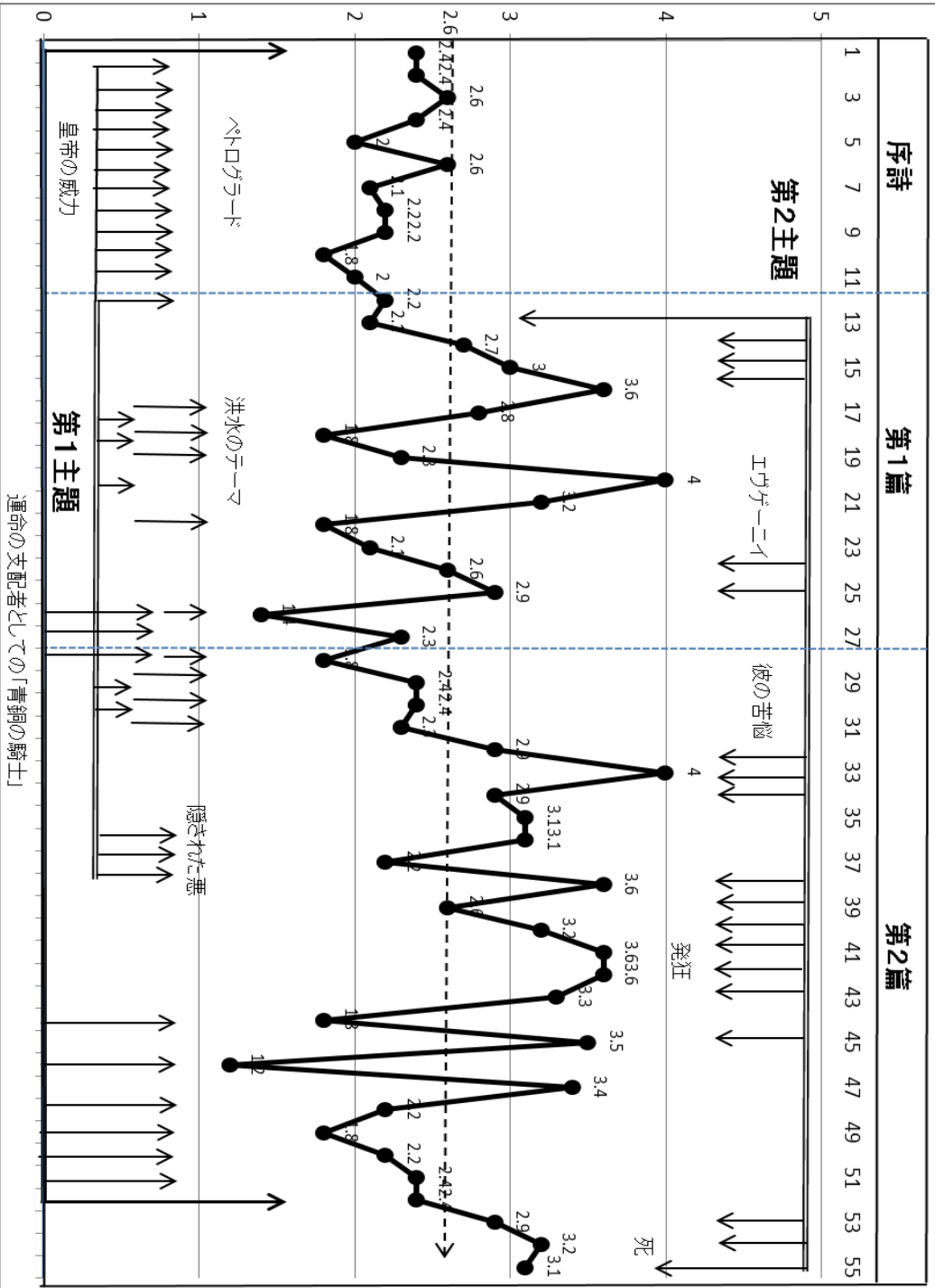
「騎士」のイメージ。55 分割の bl.8 (68-75 行) で「マルスの野」<sup>19</sup> においての軍事パレード、74 行では行進する騎士の「青銅の兜の輝き」(Сиянье шапок этих медных,) の描写が出てくる。これは青銅の騎士を予告する。ベールイの解釈では、第 1 篇初めのペテルブルグの 11 月を描いている bl.12 (98-108 行) と bl.8 のリズム値 2.2 が同じであることから、軍事パレードは 11 月に行われ、1925 年のデカブリスト鎮圧に騎士団が派遣されたという。<sup>20</sup> 「ネヴァ川」のイメージ。序詩の bl.6 (44-59 行; リズム値 2.6) に出てくるネヴァ川 (特に 46 行の Невы державное течение) は、帝国の「厳然として整然たる姿」(45 行: строгий, стройный вид) を表しており、特に 47-48 行にある川岸の花崗岩と柵の鑄鉄模様の景色は、ピョートルの偉業の象徴となっている。その同じ川が、洪水のとき、「泥棒のごとく窓を突き破って家に押し入る」(193-194 行: злые волны, Как воры, лезут в окна.)。洪水後、bl.29 (279-289 行; リズム値 2.4) の 289 行では、川は「戦場から駆けつけた馬」(Как с битвы прибежавший конь)、つまり軍馬に譬えられている。ベールイは、

<sup>18</sup> 1824 年の洪水の詳しい歴史記述については以下を参照。См.: Берх В. Подробное историческое известие о всех наводнениях, бывших в Санктпетербурге // Медный всадник. Л.: Наука, 1978. С. 105-109; Аллер С. Описание наводнения, бывшего в Санктпетербурге 7 числа ноября 1824 г. // Там же. С. 109-116.

<sup>19</sup> マルスの野 (Марсово поле) は、帝政時代に閱兵式が行われたペテルブルグの平原。その名は、軍事教練場であった古代ローマのティベリス河に面した平原 (Campus Martius)、1765 年、パリのセーヌ河岸に開設された陸軍学校に隣接する地 (Champ de Mars) の呼称を引き継いでいる

<sup>20</sup> См.: Белый. Ритм как диалектика и «Медный всадник». С. 191.

### 曲線 B



諸民族＝水の流れ (потоки народов, воды народов) という比喩は聖書に多くあり、水は「専制の魔力によって、いまだ暗い無意識状態にある民衆の自然力 (стихия)」<sup>21</sup> であり、青銅の騎士が乗っている馬だという。また、270 行の洪水＝злодей という譬えから、ネヴァ川＝エヴゲーニイを追い回す青銅の騎士 (bl.51 : 463-466 行 ; リズム値 2.4) ＝ピョートル＝悪の執行者という連想網が確立する。「小舟」のイメージ。4 行目でピョートルが見る、暗闇の中でネヴァ川に浮かぶ小舟 (чёлн) は、新帝都の市民の生活を運ぶ乗り物という意味をもつ。しかし、洪水の時、小舟は 194-195 行 (Чёлн с разбега стекла бьют кормой.) で家の窓を突き破ってくる。エヴゲーニイが渡河するときに眼にする、290 行と 300 行の小舟 (лодка, чёлн) は、「棺桶」(гроб) を連想させる。<sup>22</sup> また、小舟はエヴゲーニイの人生の暗喩であり、彼が詩末で死に至ることで、小舟＝棺桶のイメージ連関が完結する。こうして、華麗な新帝都の建設者ピョートル大帝＝姿を変貌した青銅の騎士＝泥棒＝軍馬＝デカブリスト叛乱を弾圧する騎兵隊＝民衆 (エヴゲーニイ) の迫害者という連想の網状組織が完結する。

曲線 B の説明において、いよいよベールイは MV 解釈の核心に突入する。以下のような謎めいた言葉によって。

С «Евгением» перо поэта дружно; ведь уж была написана последняя глава Онегина, к которой «Евгений» вступил в сношения с декабристами; вероятно не только перо поэта, но и душа поэта дружила с Евгением, потому что когда исчезает Евгений из своего обитальща, в него поселяется какой-то «бедный пиита»...<sup>23</sup>

プーシキンは MV のエヴゲーニイを書いていた時、『エヴゲーニイ・オネーギン』の主人公エヴゲーニイを念頭においていた。というのは、『オネーギン』最終章で、エヴゲーニイがデカブリストと関係をもつからだ。しかし、おそらく文面だけの話ではない。プーシキンはエヴゲーニイに想いをこめていた。そのことは、MV のエヴゲーニイがいなくなった住居に、身元不明の「貧しい、あわれな詩人」が入居する筋立てからもわかる。

RD 刊行当時 1929 年のソビエトの検閲官は、これらの語句の意味を絶対に理解できなかったらう。語句の真の意味はナボコフの解説を読むと明らかになる。<sup>24</sup> プーシキンの『エ

<sup>21</sup> См.: Там же. С. 204.

<sup>22</sup> См.: Там же. С. 188.

<sup>23</sup> См.: Там же. С. 195.

<sup>24</sup> See: Aleksandr Pushkin, *Eugene Onegin: A Novel in Verse*, Vladimir Nabokov, trans. (Princeton: Princeton University Press, 1981), vol. 2, pp. 311-375.

ヴゲーニイ・オネーギン』は、いま読まれている章構成とは異なっていた。本来の構想からすると、詩人は全体を10章で完結させようと願っていた。最終章の第10章は執筆途中で焼却されたが、その断片を紙片に暗号化して書き残していた。暗号文は1910年に解読された（おそらくベールイはこれを知っていたと思われる）。第10章の断章は、現在、ロシアで刊行されているプーシキン全集・選集には収録されている。そこには、オネーギンは登場しないものの、デカブリスト北方結社の集会の様子が描かれている。どのような形かはわからないが、作者が主人公エヴゲーニイの運命をデカブリスト蜂起と結び合わせようとしていたことが窺える。この事実を踏まえ、ベールイは、プーシキンが『オネーギン』で消去した主人公とデカブリストの交流をMVで再現し、同じ名をもつエヴゲーニイ＝デカブリスト、青銅の騎士＝叛乱の弾圧者ニコライ1世、1824年11月の洪水＝1825年11月のエヴゲーニイの反抗＝1825年12月のデカブリスト蜂起というプロット展開を画策したと読み解く。<sup>25</sup> プーシキン学には、MVは音韻的にも『オネーギン』を継承している議論がある。<sup>26</sup>

### 3. ブリュースフ論文からの影響

ベールイのMV解釈がブリュースフのMV論の影響を受けていることは、RDの叙述内容から見て、ほぼ間違いがないと筆者は推測する。ブリュースフ論文の初出は、1909年である（*Венгеров С.А. (ред.) Пушкин. Сочинения. СПб., 1909. Т. 3. С. 456-501*）である。ベールイとブリュースフとの出会いは1903年に遡り、二人は1904-05年にニーナ・ペトロフスカヤという女性をめぐり、泥沼の三角関係を繰り広げる。<sup>27</sup> その顛末を反映したブリ

<sup>25</sup> См.: *Белый*. Ритм как диалектика и «Медный всадник». С. 192. ベールイの説とは正反対にあたるが、杉野ゆり氏によれば、ニコライ1世の戴冠後、社会の改革者として、ニコライ1世をピョートル大帝の再来と期待する世論が存在したとのこと。См.: *Сугино Ю.* К вопросу о соотношении образов Медного Всадника и Николая I // *Japanese Slavic and East European Studies*. № 12, 1991. С. 64. 杉野氏の観点は非常に興味深く、上記論稿で関係する論文を引用されているので、併せて掲げる。См.: *Измайлов В.* Очерки творчества Пушкина. Л.: Наука, 1975. С. 35; *Эйдельман Н.* Пушкин из биографии и творчества 1826-1837. М.: Художественная литература, 1987. С. 163-164.

<sup>26</sup> 『オネーギン』14行詩連では、その押韻形式 AbAbCCddEffEgg からすると、4/4/4/2 または 4/2/2/4/2 または 4/2/2/1/2/1/2 と詩行が区切られ、文法的・テーマ的な終わりとは相応する。MVだと、2行詩・4行詩の区分が自由に組み合わせられ、多用される行送り（переносы）はこれらの塊を知らず信号となっているという議論。См.: *Рудаков С.* Ритм и стиль «Медного всадника» // *Пушкин. Исследования и материалы*. Т. 9. Л.: Наука, 1979. С. 297-301.

<sup>27</sup> 三角関係については、次を参照のこと。См.: *Мочульский К.* Андрей Белый. Париж: YMCA-PRESS, 1955. С. 54-57. 『炎の天使』に登場する狂信的な女性 Рената（中世ドイツが小説の舞台なので、ドイツ語だと Renate の筈）のモデルは、Нина Ивановна Петровская (1879-1928)である。当時、彼女は「Грив」の出版者 С. Солколов-Кречетов と離婚した状態にあった。ペトロフスカヤの人生については、以下の注を参照のこと。См.: *Богомолов Н.* Русская литература начала XX века и оккультизм. М.:

ューソフの小説『炎の天使』が刊行されたのが1908年で、この時期、ベールイがブリューソフの著作に注目していたことは疑いをいれない。ベールイは必ずブリューソフのMV論を読んでいたのであろう。

ブリューソフ論文では、それまでのMV解釈の方向性が3つに整理されている。つまり、ベリンスキー、メレシコフスキー、そしてポーランド人学者トレチアク (J. Tretiak) のMV解釈である。ベリンスキーの解釈によると、物語詩は、「集団的意思と個人的意思、個人と歴史的必然の対照」(сопоставление коллективной воли и воли единичной, личности и неизбежного хода истории)<sup>28</sup>から成立している。集団的意思はピョートル、個人の意思はエヴゲーニイが表徴し、民衆と国家を背負うピョートルにこそ歴史的必然があるとされる。メレシコフスキー論だと、西欧文明のなかにある異教 vs キリスト教、英雄主義的な自我の神格化 vs 神の内部での自我の棄却 (отречение от своего я в боге) という対立にこそMVのテーマがある。ゴーゴリやドストエフスキーが形象化した「小さな人間」は後者に属し、彼らの祖先であるエヴゲーニイの超人ピョートルに対する叛乱、キリスト教の異教的理想に対する反抗を、メレシコフスキーは支持する。トレチアクは、MVが1832年に刊行されたミツケーヴィチの『断章』(Ustep)へのプーシキンの回答だという説を唱える。特に、ミツケーヴィチの詩「オレシケーヴィチ」(Oleszkiewicz)は、1824年の洪水と、為政者の失策の報いを民衆が負わねばならないという主題の点で、MVと一致する。トレチアクは、MVの真の主題は専制とそれに対する民衆の抵抗にあるが、民衆の代表者エヴゲーニイが権力との抗争の果てに狂人になってしまう筋立てから、自由主義運動の敗北が暗示されていると結論づける。さらに述べると、ミツケーヴィチの詩「ピョートル大帝の像」(Pomnik Piotra Wielkiego)とMVは、「ヨーロッパ個人主義とロシアのアジア的な国家観(азиатская идея государства)が闘争状態に入った」<sup>29</sup>ことを表現している。その争いの結果、ミツケーヴィチはロシアでヨーロッパ個人主義が勝つと信じるが、プーシキンはそれが敗北し、自由主義の運動家は狂人になってしまうことをMVで示した。ブリューソフ自身も、3番目のトレチアク論がプーシキンの元々の構想に最も近いという考えを表明している。ベールイのRDの基本路線は、このトレチアク＝ブリューソフの読みを引き継いでいるといえよう。

反面、両者の視座の決定的な違いも指摘しておく。ブリューソフは、青銅の騎士＝ニコライ1世という観点を提示していない。次の理由から、こうした解釈はありえないとするのが常識的だ。プーシキンは、所謂「第2のボルジノの秋」(1833年)でMVを書き上げ、

---

Новое литературное обозрение, 2000. С. 464 (注 11) .

<sup>28</sup> Брюсов В. Медный всадник // Соб. соч.: В 7 т. Т. 7. М.: Художественная литература, 1975. С. 31-33.

<sup>29</sup> Там же. С. 33. 「アジア的」という言葉は、まずはタタール・モンゴル支配を指しているだろうが、ブリューソフ論文が書かれた1909年という年代を考慮するなら、黄禍論の影響もあると思える。

その年の12月6日にベンケンドルフ伯爵を通じて、物語詩の出版を皇帝ニコライ1世に請願した。12月14日のプーシキンの日記によると、12月12日に皇帝からの論評を受け取った。<sup>30</sup> そして、12月30日には、宮廷の官職である「年少侍従」(камер-юнкер)への配属を申し渡されている。こうした明白な上下関係があったので、プーシキンが、著作の直接検閲を担当しているニコライ1世に対し、デカブリスト事件を揶揄する詩を書くことなど想像ができない。だが、ベールイは、ニコライ1世こそが青銅の騎士=民衆の弾圧者だと主張する。

もう一つの双方の決定的な相違点は、以下に示す第2篇431-434行(55分割におけるbl.47; リズム値3.4)の解釈である。

431. О мощный властелин судьбы!

432. Не так ли ты над самой бездной

433. На высоте, уздой железной

434. Россию поднял на дыбы?

おお、運命を支配する強力な権力者よ!

もしやあなたではないだろうか? 奈落の底の上を

高みで、鉄の馬勒(ばろく)<sup>31</sup>によって

ロシアという後ろ足で立っている悍馬(かんば)を引き締めているのは

ブリューソフは、後ろ足で立つ青銅の騎士像は、奈落の底に向かって駆け走るロシア=馬を懸命に押しとどめている、民族の運命の支配者ピョートル大帝の象徴と理解する。<sup>32</sup> この読みだと、ピョートルはロシアの救済者となる。他方、ベールイは、プーシキンの草稿の通り、434行が *Россию вздернул на дыбы?* となっていると前提したうえで、慣用句「(馬が)後ろ足で」*на дыбы* (アクセントは最終音節)の本当の意味は、*на дыбу* (アクセントは第1音節)であると主張する。第1音節にアクセントがくる *дыба* (英 *rack*, 仏 *chevalet*, 独 *Streckbank*) とは、人体を上下に引き裂く処刑用具を意味する。つまり、ベールイは、青銅の騎士はロシアの処刑者であると捉える。<sup>33</sup>

<sup>30</sup> См.: Там же. С. 58-59.

<sup>31</sup> 馬勒(ばろく; 露 *узда*, 英 *bridle*) というのは、馬の頭上にかぶせる綱のことで、「拘束する、抑えるもの」という転義を派生させている。現代ロシア語でも、例えば、「妻が家を牛耳っている」という意味で、「Жена держит мужа за узду」という文は普通に使われる。

<sup>32</sup> См.: Там же. С. 38.

<sup>33</sup> См.: *Белый*. Ритм как диалектика и «Медный всадник». С. 207.

#### 4. ピョートル大帝＝レーニンという筆者の仮説

RDにおけるベールイのMV解釈について、筆者の仮説を開陳したい。RDの論点をまとめると、MVには次の3重の意味が掛け合わせられている。

- ①主人公エヴゲーニイによるピョートル1世の圧政への反抗
- ②デカブリストによるアレクサンドル1世の反動政治への反抗
- ③作者プーシキンによるニコライ1世の反動政治への反抗

筆者は、上記に加え、RDには、④ベールイによるレーニンの社会主義体制の圧政への反抗、という含意が埋蔵されていると見る。RDの執筆年代は1927年10-11月である。スターリン主義の台頭下の1927年にあからさまな体制批判を行えば、銃殺刑に処せられる危険もあった。1833年のMV執筆当時、プーシキンが露骨なニコライ1世批判を行えなかったの同様に、1927年のベールイがレーニン体制を真っ向から否定することは、言論界で不可能だった。筆者の仮説は、こうした時代背景の下、ベールイが、青銅の騎士＝民衆の弾圧者＝ニコライ1世という論理に依拠しながら、レーニンが創造した社会主義国家ソ連をRDで暗に批判している、というものだ。ロシアで初めて近代国家を建設したピョートル大帝と、世界で初めて社会主義国家を樹立したレーニンは同一視されているのではないか。筆者の想像力では、青銅の騎士像とレーニン像が二重写しになってくる。

ベールイの伝記的事実を追う。彼はシュタイナーの人智学に傾倒し、1912年3月～1916年8月、ドイツとスイス（ほとんどが神智学の本拠地ドルナッハに滞在）へ赴いた。1917年のロシア10月革命はモスクワで迎えた。このとき、ヴァチエスラフ・イヴァーノフに関する論文を書いていた。1918年～1921年の彼は、革命がもたらした新文化創造の昂揚感のなか、モスクワの人智学協会を企図する。<sup>34</sup>だが、1921年11月～1923年10月、恋人アンナ・ツルゲーネワ（Анна Алексеевна Тургева）と恩師シュタイナーに会いたいがためにドイツへと去る。これは政治亡命ではなかったと筆者は思う。彼はただアーシャに会いたかったのだ。しかし、ベルリンの亡命ロシア社会も彼の肌に合わず、結局、ロシアで人智学を広める意図を抱き、新生ソ連へと帰国する。その後、新しい政治体制の桎梏に耐えながら、MVの洪水後のエヴゲーニイのごとく、同伴者作家として辛い極貧生活を送ることになる。ベールイの心境は以下の通りだった。

Русская эмиграция мне столь же чужда, как большевики; в Берлине я буду один. Антропософское О-во? Но — нет, нет; там я был бы *бараном* в стаде; моя работа в Антропософии — в России. Но

<sup>34</sup> См.: Белый А. Почему я стал символистом... // Символизм как миропонимание. М.: Республика, 1994. С. 477 (section 14).



Россия меня измучила.<sup>35</sup>

ロシア亡命社会は、ポリシェヴィキと同じくらい疎遠だ。ベルリンでは、わたしは孤独だろう。人智学協会？ いや、No, No だ。わたしは盲信者の群れの一匹にすぎないだろう。人智学協会におけるわたしの仕事は、ロシアにある。が、ロシアはさんざんわたしを苦しめた。

ベールイのロシア革命への評価は完全に変化している。彼が 1923 年 10 月 26 日にモスクワへ帰国したとき、「ロシア革命の父」と称されるレーニンは 1924 年 1 月 21 日に没しており、ペテルブルグは「レニングラード」と改称されていた。1880 年生まれのベールイにとって、ペテルブルグはペテルブルグであり、なぜ RD 評論において、「ペトログラード」という言葉を乱用するのだろうか？ もちろん、MV の第 1 篇冒頭において、「ピョートルの都市」という意味でペトログラード（98 行: Над омраченным Петроградом）は用いられている。反面、1914-24 年の公式語であったペトログラードは、第 1 次大戦とロシア革命の記憶と密接に結びついている。ベールイは、MV の 93 行「恐ろしい時」（ужасная пора）に、ロシア革命後の内戦、ボルガ飢饉、戦時共産主義、スターリン独裁というロシアがたどった苦難の歴史の残映を重ね合しているのではないか、という疑問が筆者の胸に湧き上がってくる。RD 執筆時の 1927 年、ベールイはレニングラードという都市名を用いたくなかったのではないか？ それによって、レーニンの築いた社会主義を告訴しているのではないか？

筆者の仮説の根拠は、二つある。第 1 に、レーニンの死後に起きたペテルブルグの洪水が、1927 年に RD を書いていたベールイの頭のなかに揺曳していたと筆者は想像する。レーニン没後の約 8 カ月後、1924 年 9 月 24 日（MV の題材となった 1824 年の洪水の約 100 年後）に巨大洪水がレニングラードを襲った。<sup>36</sup> さらに、1926 年 12 月にも旧首都は洪水で被災している。ベールイは、当然のことながら、このことを知っていたに違いない。また、デカブリスト蜂起の 100 年後の 1925 年、「元老院広場」が「デカブリスト広場」と名称変更されたことも、周知の事実だっただろう。

第 2 の根拠は、1927 年当時、ベールイが抱いていたレーニン観にある。これは、1924 年 1 月 21 日のレーニンの死をめぐる、ベールイとイヴァーノフ＝ラズウームニクの往復

<sup>35</sup> Бугаева К. Воспоминания о Белом. Berkeley: Berkeley Slavic Specialties, 1981. С. 13. 引用文は編集者 J.Malmstad の Introduction に書かれている。

<sup>36</sup> См.: Мальцева. В. Переименование Петрограда в Ленинград [http://22-91.ru/statya/pereimenovanie-petrograda-v-leninograd/14.09.2011] (2012 年 12 月 20 日閲覧)。1924 年の洪水は、1824 年に次ぐ破壊度だった。旧首都の市街地の半分が浸水し、建物 5000 棟以上が損壊し、舢舨や蒸気船が岸に乗り上げた。水は 1 週間以上もレニングラードから引くことはなかった。

書簡の1924年2月6日のベールイの返答から明らかになる。1924年1月28日の手紙で、イヴァーノフ＝ラズウームニクは、ロシア史の変革者ピョートル大帝とレーニンを等視し、レーニンが、「ロシア史におけるピョートル時代の終わりの象徴、西欧史におけるナポレオン時代、革命後の時代（「フランス革命後とロシア革命後」の意味を重複させているのだらう——筆者注）の象徴」<sup>37</sup>であった、と評している。これに対し、ベールイは、「レーニンは世界を創造したデミウルゴスとだけと比較できる」（Ленина можно сравнить только с Демиургом, создателем Вселенной）<sup>38</sup>と答える。デミウルゴスとは、グノーシス主義のコンテクストにおいて、真の善なる絶対神の意思に反して、悪なるこの世を創造した神である。また、レーニンの遺体の永久保存とレーニン廟建設の報道を受けて、ベールイは、「得体のしれない新しい崇拜を想起させないか」（Разве это не напоминает все о каком-то новом культе）<sup>39</sup>という感想をもらしている。1924年のベールイの予感、その後、スターリンの個人崇拜によって現実化する。

筆者の仮説を要約する。プーシキンの物語詩では、市民生活の安寧をないがしろし、強力な国家の建設を目指すピョートル大帝の偉業の背後で、為政者の暴力的な国家主義政策によって犠牲となる個人の悲惨さが描かれている。そこで、ベールイは、専制に反抗したデカブリストと権力側による彼らの弾圧に想いを馳せる。筆者は、そのように書いているベールイの胸中に、レーニンの社会主義国家建設と、その大義の前で蹂躪される民衆のヴィジョンが去来したのではないかと考える。つまり、洪水＝ピョートル大帝が国民に強い暴政＝社会主義、青銅の騎士像＝死後に偶像化されるレーニン、国家主義の犠牲者エヴゲーニイ＝革命後を生きるベールイという暗喩が、RDには籠められているのではないだろうか？ 筆者の見解では、RDのMV論は次のような二重構造になっている。

①政治的重圧の下で、詩人プーシキンが詩に託した、隠された意味

②政治的重圧の下で、後世の詩人ベールイが、プーシキン詩論に籠めた隠された意味

## 5. 結論：RDの意義

RDのMV論は、世界文学史あるいはロシア文学史のうえで、どのような意義をもつのだろうか。筆者自身の見方を開陳するならば、RDで示されたベールイの発想自体は極めて独創的であるものの、万人に承認されうるような記述科学の客観性の域までには到達しなかった。だが、どのような点においてベールイの発想法は独自だったのか。以下の3点について考量してみたい。

<sup>37</sup> Бельй, Ивнов-Разумник. Переписка. С. 280.

<sup>38</sup> Там же. С. 284.

<sup>39</sup> Там же. С. 283.

第1に、ベールイは詩を音楽に等しいとみなし、ロシア語の弱強4歩格を例に、詩の音的変動を楽譜のように数値化、グラフ化できると信じた。MV分析では、ブロックの音的数値の変動、具体的には各ブロックのリズム値が平均線2.6より上か下かという高低が、国家と個人という二つの対峙的な意味主題の相剋に一致していることを立証しようとした。RDのタイトルに冠された「弁証法」(диалектика)という語は、一見、マルクス＝レーニン主義的な「弁証法的唯物論」(материалистическая диалектика)を踏襲しているように想起されがちだが、実は、音楽理論の「対位法」(контрапункт)の謂いに他ならない。詩は音楽であるという比喻はよく使われるが、これを数と図によって例証しようとした試みは、世界文学史上、おそらく類例がないのではないか。

この点、西欧におけるベールイ研究に先鞭をつけたエルズワースの見解——(亡命から帰国した1923年の後の作家は)「新しい政治的文化的状況に適応しようと努め、いくつかの著作ではマルクス主義的な理念に敬意を表した」<sup>40</sup>——は、誤りであろう。対位法を基に散文を分解し、詩文もどきに近づけようとした言語実験である『第2シンフォニー』(1902)からRD(1929)まで、詩＝音楽とするベールイの思考法には一貫性があり、彼は終生まで政治とは疎遠であった。

第2に、ベールイは、MV分析において、誰もが注意しなかった詩学上の周縁的な現象に着目した。弱強4歩格の詩脚における韻律からの逸脱、1詩行内で文が途切れる *перенос* の問題、弱強4歩格が2行にまたがる *красная строка* の問題がそれである。これは、ロシア詩学ならびにプーシキン研究史において先駆的な功績といえるだろう。

第3に、ベールイは、『オネーギン』第10章の頓挫した構想(主人公のデカプリスト蜂起との関係)が、プーシキンのMV構想の根になっており、青銅の騎士＝ピョートル大帝＝ニコライ1世という説を唱えた。他方、ナボコフは、1964年刊の『オネーギン』英語注釈書において、主人公がデカプリスト事件とかかわることを作者が考えていた可能性が強いというような曖昧な書き方をしている。ベールイは、エヴゲーニイがオネーギンの生まれ変わりだと明言している。RDがソ連体制のなかで出版されたことを考慮するなら、この解釈のプーシキン研究史上における先見性ははっきりとしている。

他、本論に付け足したいことは、ピョートル大帝についてのロシア文化史における評価についてである。現在のロシアでも、ピョートル大帝は国家のことをひたすら思い、戦争に勝利し続け、自民族に栄光をもたらした偉人と称えられている。しかし、メレシコフスキーの小説『ピョートルとアレクセイ』(1905)では、イヴァン雷帝＝ピョートル大帝の文脈において、大帝は否定的に暗喩化されている。ベールイの小説『ペテルブルグ』

<sup>40</sup> J.D. Elsworth, *Andrey Bely: A Critical Study of the Novels* (Cambridge: Cambridge University Press, 1983), p. 4.

柿 沼 伸 明

(1913-14) に登場する「青銅の騎士」も、メレシコフスキー＝ブリューソフ路線を継承しているのではないかと想像される。いずれにしろ、青銅の騎士とエヴゲーニイ、国家と個人という問題性は、今のロシアの現状にまで引き継がれた重大な問題性であることは確かである。

本稿の執筆過程で、MV 研究者の杉野ゆり氏より多くの貴重なご助言を賜り、MV に関する論文の提供を受けた。杉野氏の甚大なるご協力に対し、伏して感謝の意を表したい。また、筆者が東大大学院でロシア文学を学んでいた時の指導教官であられた長谷見一雄先生の学恩に対し、全幅の謝意を捧げたい。

## Темы государственности и личности в понимании А. Белым пушкинской поэмы «Медный всадник»

КАКИНУМА Нобуаки

В данной статье рассматривается толкование А. Белым пушкинской поэмы «Медный всадник», которое было изложено в 4-й главе критической работы «Ритм как диалектика и “Медный всадник”». Задачи настоящей статьи заключаются в том, чтобы оценить содержание трактовки Белого и выявить истоки его мышления.

Мы полагаем, что процедура логического подхода Белого к «петербургской повести» осуществляется следующим образом. Сначала он пытается исчислить ритмическую величину всех строк в поэме на основе выведенного им уравнения « $(n - 1) \div n$ », где «n» обозначает промежуток между одинаковыми ритмическими строками. Из этих цифр можно вывести среднюю величину 2.6 (она называется критиком «нормалью»). Затем он двумя способами расчленяет текст поэмы, не размежеванный в виде строф, на 22 и 55 отрывков. Как известно, в «Медном всаднике» строка не всегда совпадает с понятием стиха из-за наличия «красных строк» (4-стопного ямба, разделенного 2-мя строками). Ритм каждого

отрывка можно считать, следуя принципу его аксиомы «  $(n \times 4) \div m$  », где «n» — сумма ритмических величин в одной строфе, а «m» — число строк в одной строфе. Итак, можно нарисовать графики двух видов (разбиение на 22 и 55 отрывков). Белый определяет их отдельно как «кривая Б» и «кривая В».

Рассматривая эти 2 графика, Белый находит определенное соответствие между изменением их линий и фабульной, смысловой переменной «Медного всадника». Например, в точках, расположенных ниже уровня 2.6 («низ»), описывается державный вид Петербурга, наводнение, уподобленное «злодею» и напоминающее Петра I — угнетателя народа, раздавливание Всадником Евгения. В точках же, расположенных выше, чем 2.6 («верх»), изображаются мечта Евгения о создании семьи до наводнения, внутренние страдания после него, сумасшествие и окончательная смерть. Отсюда Белый заключает, что поэма основана на двух началах: красе построенной могучим императором новой столицы и гражданина, страдающего от подвига великана в русской истории; государственности и угнетенной ею личности; Петре Великом и ничтожном Евгении. Иными словами, по утверждениям Белого, Петр — деспот, создатель зла, наводнения, унесшего жизни простых людей.

Белый высказывает еще одно интересное наблюдение: мятеж героя против Всадника происходил в ноябре 1825 года, а смерть Евгения относится ко времени не ранее мая 1826. Пушкин нарочно поставил две кульминационные сцены в моменты восстания декабристов и казни его главных зачинщиков (в июле 1826 года), выразив так свое чувство сожаления к пострадавшим (некий *бедный пиита* поселяется в квартиру, оставленную Евгением). Белый настаивает на том, что поэт осуществил тут несбывшиеся замыслы оставленной 10-й главы «Евгения Онегина», изображающей связь героя с декабристским движением. Поэтому совпадение имен героев обеих поэм не случайно. Согласно замечаниям критика, подлинный Всадник является не Петром I, а Николаем I, разгромившим политический протест, между тем как Евгений — декабристы.

Нам кажется, что это воззрение Белого проистекает из мысли В. Брюсова, которая была представлена в трактате «Медный всадник», опубликованном в 1909 году. В нем Брюсов показывает 3 традиционных подхода к поэме: Белинского, Мережковского и польского ученого Третьяка. Брюсов поддерживает ее осмысление последним, суть которого состоит в том, что Пушкин написал поэму в ответ на сатиры Мицкевича «Ustęp». В этих сатирах польский поэт видит в Петре воплощение самодержавия, тайком заложив в стихах упреки Пушкина в расстоянии с вольнодумством.

В заключение мы предлагаем до сих пор нигде не высказывавшуюся точку зрения по поводу работы Белого. 4-я глава книги была написана в октябре-ноябре 1927 года. Должно

быть, Белый включил в ассоциативную цепь Петр I = Медный Всадник = Николай I еще одного важного персонажа в русской истории: Владимира Ильича. Ленин умер 21 января 1924 года. В письме Иванова-Разумника Белому от 28/1/1924 первый сравнивает Петра и Ленина в качестве лиц, коренным образом изменивших судьбу родины. В ответ (письмо от 6/2/1924) Белый отождествляет Ленина с «Демидургом» (богом-творцом злого мира в контексте гностицизма). К тому же, примерно через 8 месяцев (24/9/1924) после смерти вождя революции новорожденный Ленинград настигает мощное наводнение (через сто лет после наводнения в пушкинской поэме). Наверное, в процессе написания книги сам Белый, писатель-попутчик, «бедный пиита», считал себя Евгением.